

# 飛鳥寺の調査

## —第119-4次

### 1 はじめに

明日香村大字飛鳥に所在する飛鳥寺は、592年(崇峻5年)に造営の始まった我国最古の本格的寺院として知られ、現在は中金堂位置に立つ安居院がその法灯を伝えている。1956年からの3次にわたる奈良国立文化財研究所の調査により、一塔三金堂という特異な伽藍配置を持つ寺院であることが確認されている(『飛鳥寺発掘調査報告』)。

本調査は個人住宅の建替えに伴い、2002年12月9日～18日の期間に行った。調査地は安居院本堂(中金堂跡)の東45mであり、東金堂からは東北30mに位置する。調査面積は41.5㎡である。過去の調査結果から、今回の調査区は東面回廊想定位置にきわめて近い位置にあると判断され、その検出と国土座標上の位置の確認が期待された。

### 2 遺構と遺物

地表面の標高は106.9mである。層序は上から表土、灰色砂質土(耕土)、黄灰色粘質土(床土Ⅰ)、灰褐色粘質土(床土Ⅱ)、暗灰色砂質土(多量の酸化鉄を含む)である。暗灰色砂質土上面では、散漫ではあるが粒径40mm程度のバラスの存在を確認している。遺構検出は、まずこの暗灰色砂質土層上面で行った。その結果、南北方向の小溝3条、東西方向の小溝1条を検出したのみであった。さらに暗灰色砂質土層を除去したところ、約15cmの厚さでのバラス層(バラス間は暗灰褐色砂質土が充填)を確認した。バラス層上面の標高は105.9mである。バラスの粒径は30mm～150mmであり、上部には大型の、下部には小型のものが多く。バラスは調査区全面に存在し、遺構は確認されなかったが、バラス層上面で七世紀末に比定される複弁蓮華文軒丸瓦2点を得た。その後、調査区東端及び南端でバラス層を除去し下部の土層堆積の確認を行ったところ、その直下で瓦を敷き詰めた面を認め、さらにその下には明灰色砂質土層(5cm)、茶褐色砂層(20cm)が堆積し、地山と考えられる明茶褐色砂層に至ることも併せて確認した。瓦敷面下部の二つの層には、若干ではあるが瓦などの遺物を含んでいた。摩滅が非常に進んだ細片であることから所属時期は不明であり、あるいは上層の遺物混入の可能性も考えられる。

### 3 バラス層と瓦敷面の性格について

今回の調査で確認したバラス層と瓦敷面は、過去の調査の際にも確認されている。その報文中では瓦敷上面を利用した形跡はなく、その上層のバラス層と同時に施工されたと記載され、その時期については8世前半(報告中では藤原宮期も奈良時代に含めた上で、奈良時代中期)と推定している。

今回確認した瓦敷面に使われた瓦は、数枚の丸瓦を除き、大部分が平瓦であり、そのすべてが凸面を上に行っている。さらに少数ではあるが凸面に縄叩き調整の認められる平瓦もあった。また座標X=-169,103.5を境に、その南北で瓦の敷き方に明瞭な差異が認められる。南側では灰色又は茶色に近い色調の瓦を東西方向に、北側では黒色又は赤色に近い色調の瓦を西南～東北方向に斜めに敷いていた。この境界の解釈には二つの場合が考えられる。一つは瓦敷きを行う際の施工単位と考える場合であり、いま一つはこの境界に境内利用に関連する何らかの意味を持たせる場合である。今回確認したこの境界線を西側に延長すると、中金堂南端部分につきあたり、更に延長すると西門前面に達する。このことから、後者の可能性も否定はできず、その場合瓦敷上面が生活面として機能していた時期があり、バラス敷面との間には時期差が想

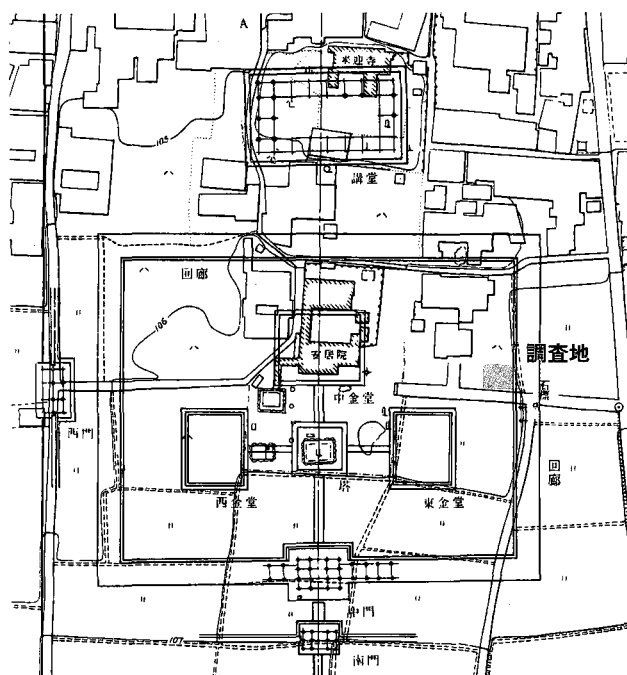


図105 飛鳥寺伽藍配置と調査区の位置 1:2000

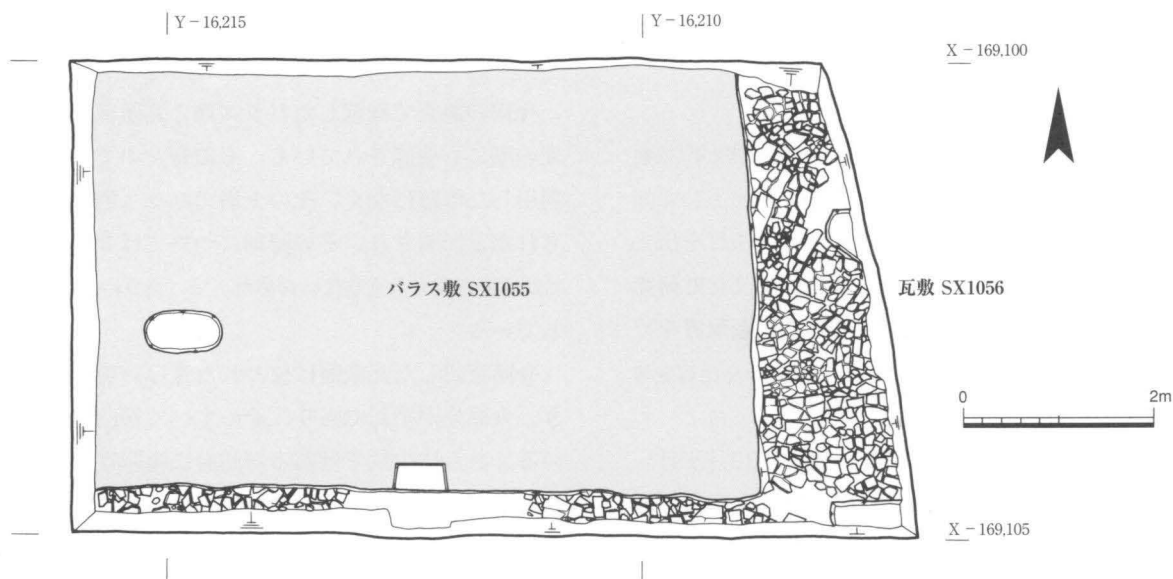


図106 第119-4次調査遺構図 1:80

定される。

瓦敷面の形成時期については、前述のとおり従来は8世紀前半としていた。今回の調査でも確認された凸面縄叩き調整の平瓦の所属時期を、すべて藤原宮期以降と判断していたためと推定される。しかし近年、縄叩き調整は飛鳥寺創建時の瓦にも認められるという見解があり、

瓦敷面の形成時期を最大で創建期近くにまで上げることも可能である。今回確認した瓦敷は、保存状態が良好であり、瓦を原位置に保存したため、その詳細な観察はできなかった。しかしサンプルとして採集した縄叩き調整の平瓦の年代は7世紀末に比定され、瓦敷きの施工時期もそれをさかのぼらないことは確実である。今後の調査で組織的な瓦のサンプリング調査を行い、その観察結果に基づいてより詳細な瓦敷面の形成時期を決定する必要がある。

#### 4 まとめ

今回の調査では、東面回廊に近接した場所に調査区を設定したが、回廊およびその雨落ち溝などの位置を確認することはできなかった。しかし明日香村が行った東面及び南面回廊の調査成果(明日香村教育委員会『明日香村遺跡調査概報平成12年度』2002年)から考えると、東面回廊西雨溝西端は調査区の東端から至近の位置を通ると推定される。また、従来バラス層と瓦敷きは8世紀前半に同時に施工されたものとされていた。今回の調査結果からは瓦敷きの施工時期について従来の所見とは矛盾はないが、両者の施工には時間差がある可能性を指摘した。なお瓦敷面と地山(明茶褐色砂層)との間に瓦などの遺物を包含する層が存在したが、瓦敷面に先行する創建期の生活面については確認し得なかった。瓦敷面を形成する以前に削平・整地された可能性も考えられる。(渡辺丈彦)



図107 瓦敷き面検出状況 (北から)